

『視聴草』所収国文学系資料解題②

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四七号に掲載した拙稿『視聴草』所収国文学系資料解題①に続くものである。

『視聴草』は、江戸後期の幕臣である宮崎成身によって編まれた雑記で、貴重な写本・版本を収録、日常の出来事から事件、怪談・奇談まで、広範囲に渡る記事が載せられている。もとは成身が自ら写したもので、あるいは収集した小冊子で、一八〇〇点あまりにのぼるそれらを一七八冊に合綴した。成身自身の検索の都合上、集めては綴じ、それが一〇冊集まるごとに一集と題する、という過程を経て現在の形になっているため、収録された書の順序には規則性がなく、用いられている料紙も大きさも異なるものが一冊に綴じられている。収録されている資料の上限は天保元年、下限は慶應元年。

詳しい解題はすでに福井保氏の『視聴草』解題〔内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二 視聴草』第一巻）に載る。また氏家幹人氏の『視聴草』絵図細目〔『北の丸』三八号、二〇〇五年）では、本書に収録された絵図の細目を挙げている。

本稿では、これらの先行研究をもとに、収録資料のうち国文学資料に焦点を絞り、紹介する。

【四五】大樹公六十御賀御屏風画讃和歌 享年不明

十集之一 「請求番号二七・〇〇三四（九一）」

本資料は大樹公（徳川将軍）の六十賀を祝って詠まれた屏風歌（屏風絵の画讃として詠まれた和歌）をまとめたもの。ここでいう大樹公とは徳川家斉のことと考えられる。

屏風歌は九世紀から一〇世紀にかけて成立したもので、算賀行事にも盛り込まれるようになり、寛平三年の二条皇太后高子の五十賀をはじめ、すでに『古今和歌集』に用例を見ることがができる。屏風歌は元来は専門歌人によって詠まれるものであったが、次第に幅広い公卿・殿上人によって詠まれるようになり、それが算賀の規模を示すようになった。

本資料では、正月から一二月までの屏風絵にそれぞれ一首が詠まれ（月次屏風歌）、飛鳥井雅光、鷹司政通、有栖川宮韶仁親王らが歌人として名を連ねている。題者は冷泉為則。屏風絵の絵師は、原在中。本資料に年記はないが、これらの人物の生没年から換算するに、本資料は第一一代将軍徳川家斉の六十賀の折の屏風歌であると想定される。『泰平年表』によれば、天保三年二月四日に、禁裏で徳川家斉の六十賀が催され、仁孝天皇御製および公卿・殿上人六一人の御詠があった。また月次御屏風和歌が仙洞（上皇）から進められたことが記載されており、これによって本資料が、光格天皇（当時、退位して上皇）の命によって制作された屏風絵であったこと

がわかる。

屏風絵を担った絵師の原在中は、江戸時代後期の絵師で、原派の祖とされる人物である。狩野派・土佐派に並ぶ絵師として神社仏閣の障壁画・襖絵など多くの作品を手掛け、寛政内裏造営にも参加している。有職故実に通じ、子の在明はその知識を継いで、禁裏絵所に勤仕し、正六位上へのぼっている点から見ても、朝廷と深い繋がりを持つ絵師であった。本資料では「原在仲」と名前が記されており、その横に「八十翁」（墨書）の書き入れがある。在中は天保八年に八八歳で没しており、本資料の成立時はすでに八三歳だったと考えられる。

本資料の目録書名は宮崎成身による朱書「大樹公六十御賀御屏風画賛和歌」（一才）による。墨書では「大樹公六十賀／仙洞御屏風」とある。

本資料の料紙は、他の料紙に比べてやや高さが無い。（半葉二三・三糎×一七・〇糎）左下に水損の形跡がある。

一才に「図書局文庫」「日本政府図書」の印記があるが、これは本資料が、第九一冊目の冒頭にあたるため。

【書誌】

内題・「大樹公六十御賀御屏風画賛和歌」（朱書・一才）「大樹公六十賀／仙洞御屏風」（墨書・一才）

墨付丁数・二丁

遊紙・なし

料紙・楮紙（半葉二三・三糎×一七・〇糎）

行数・八行

字高・一六・五糎

印記・「図書局文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

写年・書写者については不明。

【四六】下わらび 冷泉為村 写年不明

十集之一 「請求番号二二七・〇〇三四（九一）」

近世中期に活動し、冷泉家中興の祖とされる歌人・冷泉為村の手紙を、門人の三枝左兵衛守雄が書写したものである。題の『下わらび』は、為村の知人がその最期に詠んだ歌にちなむ。

本資料は、為村が亡くなった知人の和歌を引き、それに関するいきさつ及び、歌論を展開する内容。冒頭に「故殿の御筆をうつす」とあり、為村の没後に、門人が写したことがわかる。また、本資料の末尾には、「下わらび附録」と題された文章が付く。これは書写者である三枝左兵衛守雄が、この資料に関するいきさつを解説したもの。

これによれば、伊奈半左衛門の家臣に小川有香という人物がいて、その妻が和歌を能くしたという。縁あって、為村に弟子入りを望んだが許されず、とうとう亡くなってしまった。「下わらび」の歌はこの妻が詠んだものだという。

この逸話は同様の内容のものが『耳袋』巻之一に所収され、これによれば為村の門人であった磯野政武が『下蔵』という題を付けて物語ったものであるとする。内容はほぼ同じであるが、本文は全く異なるもので、本資料との前後関係ははっきりしない。「下わらび附録」にある書写者の言によるならば、本資料は、為村が磯野政武のもとへ書き送った手紙で、閲覧することがなかなか許されなかったために、密かに書写したものだという。奥書には、「安永乙未のとし神無月初の七日松本態長のもとよりかり行て写

し畢ぬ」とある。墨書でカギ括弧がついている。

前掲資料と同筆。料紙もほぼ同じ大きさ(半葉二四・三糎×一七・〇糎)で、同一時期の書写か。但し、本資料の料紙はやや黄ばみがあり、前掲資料とは異なる。一才の右上、本来、内題が書かれるであろう位置の料紙が、約七・五糎×一・五糎の範囲で切り抜かれている。

【書誌】

内題・「下わらび」

墨付丁数・六丁

遊紙・なし

料紙・楮紙(半葉二四・三糎×一七・〇糎)

行数・一〇行

字高・一八・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

写年・書写者については不明。奥書に従うならば安永四年の書写。

【四七】武蔵野紀行 伝北条氏康 写年不明

十集之一 「請求番号二二七・〇〇三四(九一)」

本資料は、戦国武将であり歌人でもあった小田原北条氏第三代北条氏康の作とされる武蔵野の紀行文。天文一五年に武蔵野を訪れた際の風景や事物と和歌を書きとめた内容であるが、作者を氏康に仮託した偽作とするのが一般的。現存する写本は多い。当館所蔵の『紀行類聚』(請求番号一七七・一一一五)にも所収されている。

北条氏康は旧勢力を退けて関東一円に勢力を伸張し、後北条氏の全盛期を築いた武将である。父の氏綱の死を受けて天文一〇年に家督を継いだ。代替り檢地などの内政手腕も高く評価されると同時に高名な文人であり、和歌は三条西実隆に学んでいる。詩歌・書を能くしたため小田原城下には歌壇が形成された。

ただし、本資料の『武蔵野紀行』は、偽作である可能性が高いとされる。まず本資料に見える天文一五年は、富士川以東の領地を巡って今川義元と対立した時期に相当し、このとき義元と結んだ山内・扇谷の両上杉氏、さらには古河公方足利晴氏の圧力によって後北条氏は窮地に立たされており、武蔵野へ見聞に出掛ける時間があったとは考えにくく、また、同時にそれに相当する記録も今のところ見えない。さらに、連歌師宗長による『東路の津登』との類似が指摘され、また、誤った内容の記事も多く、後世の人物が『東路の津登』の記述を基にして『武蔵野紀行』を書いたとかねてから指摘がある。(田中義成「北条氏康の武蔵野紀行の真偽に就て」『歴史地理』一・四号、一九〇〇年)これについては、北条氏康の顕彰のために創作されたと見る向きもある。(白井忠功「北条氏康の旅——『むさし野紀行』『立正大学文学部論叢』一一三号、二〇〇一年)本資料では、内題の下(一才)に作者名として「平氏康」と記されている。

本資料は、前掲資料とほぼ同じ大きさの料紙(半葉二四・三糎×一七・〇糎)で、同筆と思われる。

末尾(三才)に奥書がある。

「安永乙未神無月六日書両窓下」

前掲資料と同じ安永四年の年記を持ち、料紙の大きさも近く、同筆であるなどの点から見て、前掲の『大樹公六十御賀御屏風面讃和歌』『下わらび』と本資料は併せて、同一人物によって同一時期に書写されたものと見られ

る。これらをまとめて一緒に『視聽草』の中に綴じたと考えられる。

【書誌】

内題・「武蔵野の紀行」（墨書。「の」部分に朱書で点）

墨付丁数・三丁

遊紙・なし

料紙・楮紙（半葉二四・三糎×一七・〇糎）

行数・一〇行

字高・一八・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

写年・書写者については不明。奥書に従うならば安永四年の書写。

【四八】たまくの記 新見正路 写年不明

十集之二 「請求番号二二七・〇〇三四（九二）」

本資料は幕臣の新見正路による紀行文。別書名に『多摩多摩能記』。天保三年の秋に徳川家慶に従い狩場に出掛けた際のもの。同道した人物に、同じ幕臣で御側御用取次の白須政徳（甲斐守、通称・鉄五郎）や、松平正名（筑後守、通称・豊三郎、西丸御側御用取次）、平岡頼暢（石見守、通称・隼人、西丸御側御用取次）らの名が挙げられている。多摩川沿いの山里の風景と、秋の景物が和歌に詠まれている。大東急記念文庫に『新見正路歌文稿』所収の浄書本と初稿本が伝わっている。

新見正路（通称吉次郎）は、徳川家斉・家慶に仕えた幕臣で、歌人、蔵書家としても知られる。御小納戸・御使番・目付などを歴任し、文政一二

年には大坂西町奉行を務め、このとき淀川大濠い工事を指揮して、その際の土砂で天保山を築いたことでも知られている。天保の改革の際に徳川家慶の御側御用取次となるが、水野忠邦の失脚に伴い罷免。詩歌を能くし、著作は歌集をはじめとして数多くに上る。また蔵書家としても知られ、その文庫を賜廬文庫と称した。嘉永元年に五八歳で没。

本資料の成立した天保三年当時、新見正路は西丸小姓組番頭格式の地位にいた。同道した白須政徳はこのときの將軍家斉の御側御用取次。松平正名と平岡頼暢は共に西丸御側御用取次で、家慶の側近である。

本書に奥書はなく、末尾には「源正路」とあるのみ。

本資料は匡郭が刷られた料紙（半葉二三・七糎×一七・〇糎）に書写されている。『視聽草』所収の資料にたびたび見られる料紙で、匡郭の欠損部分から見て十集之二の目次に使われている料紙と同一。

【書誌】

内題・「たまくの記」

墨付丁数・一〇丁

料紙・楮紙（半葉二三・七糎×一七・〇糎）

行数・一〇行

匡郭・四周双辺（半葉一八・〇糎×一三・〇糎）

印記・なし

【写年・書写者】

目次に使われている料紙と同一であることから見て、宮崎成身の筆と考えられる。写年は不明。

【四九】十番虫合 三島自寛跋・加藤千蔭判・賀茂季鷹判 写年不明

十集之六 「請求番号二一七・〇〇三四（九六）」

本資料は、天明二年に催された虫合の会の記録。主催は国学者で歌人の三島自寛で、梅若伝説で知られる隅田川の木母寺で開催された。

十番から成り、左を鈴虫、右を松虫として、虫の音色はもちろん虫籠の作り物の風雅さも競われた。さらにそれを詠んだ和歌が合わされて、虫合と歌合の両方の性質を持っているといえる。虫判（虫の評価）は加藤千蔭、歌判（歌の評価）は賀茂季鷹が務めた。

本資料に添えられた絵は虫合で合わせられた虫籠の作り物で、左右の絵のあとに、左右の和歌や判詞が続く。大東急記念文庫に伝わる絵巻『虫十番歌合絵巻』を写したものと思われるが、本資料の場合は、袋綴じの料紙の見開きを一面面として絵を描いている。絵の位置は以下の通り。

一ウ・二オ（見開き）、二ウ・三オ（見開き）、四ウ・五オ（見開き）、
五ウ・六オ（見開き）、七ウ・八オ（見開き）、八ウ・九オ（見開き）、
一〇ウ・一一オ（見開き）、一一ウ・一二オ（見開き）、一三ウ・一四
オ（見開き）、一四ウ・一五オ（見開き）、一六ウ・一七オ（見開き）、
一七ウ・一八オ（見開き）、一九ウ・二〇オ（見開き）、二〇ウ・二一
オ（見開き）、二二ウ・二三オ（見開き）、二三ウ・二四オ（見開き）、
二五ウ・二六オ（見開き）、二六ウ・二七オ（見開き）、二八ウ・二九
オ（見開き）、二九ウ・三〇オ（見開き）

以上、計二〇図。

料紙は薄様の紙に雲母引を施したもので、他の資料と大きく異なっている。また、大きさ（半葉二七・五糎×一九・〇糎）も他の資料に比べて高

さがわずかに低い。但し、本資料が綴じられている十集之六は、他の資料に關しても高さが二八・〇糎程度あり、『視聽草』の中でも料紙が大きなものばかりが綴じられている。表紙が横刷毛目や丁子引のものがほとんどであるのに対し、十集之六だけ、布目型押の砥粉色の料紙に、藍色で花の文様が刷ってあるなどの点からみて、元々、別の本の表紙だったものを、再利用している可能性が高い。

虫判を務めた加藤千蔭（橘千蔭とも）は『万葉集略解』を完成させるなど国学者として多くの業績が知られているが、歌人としても名高く、同門の村田春海と共に江戸派の双璧とされる。建部綾足に絵を学び、大和絵風の作品を残している。文化五年に七四歳で没。

歌判の賀茂季鷹は国学者で歌人、京の賀茂別雷神社（上賀茂神社）の家に生まれた人物で、少年期には有栖川宮職仁親王に近侍して和歌を学び、十代後半から江戸に遊学、このときに加藤千蔭ら江戸派の歌人と交流を結んだ。堂上・地下に関わらず多くの人々と親交を結び、門人も多く、この化政期の歌壇の中心的な人物である。正四位下、安房守に至る。天保十二年に八八歳で没したとされるが、諸説ある。

跋文は、この虫合を主催した三島自寛。本文末尾（三二ウ）には「源景雄」とあるが、これは本名。江戸日本橋の幕府御用の呉服商であったが、有栖川宮職仁親王に和歌を学び、また賀茂真淵に国学を学んだため、加藤千蔭・賀茂季鷹ともに交流が深かった。同門の荷田在満とも親交が深く、安永九年には角田川扇合を主催している。文化九年に八九歳で没。

彼の跋文によれば、この虫合が開催されたのは木母寺で、天明二年八月十日のことであったという。跋文の年記は同年同月の末となっているので、開催からまもなく記録したと考えられる。

本文末尾（三二ウ）に「図書局文庫」の印記があるが、これは本資料が

『視聽草』十集之六の末尾に相当するため。

【書誌】

内題・「拾番歌合」

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三二丁（見開き二〇図）

料紙・楮紙（薄葉・雲母引）（半葉二七・五糎×一九・〇糎）

行数・一四行

印記・「図書局文庫」（三二ウ）

【写年・書写者】

写年・書写者は不明。

【五〇】後鳥羽帝遠島百詠 文化十三年写

続初集之二 「請求番号二一七・〇〇三四（一〇二）」

一般的には『遠島御百首』の書名で知られる、隠岐遠島後の後鳥羽院による百首和歌。別名に『後鳥羽院御百首』『隠岐の御所百首和歌』『後鳥羽院隠岐国百首』など。承久の乱によって隠岐に流された後一九年間の歳月が詠まれている。部立は春夏秋冬雑。

伝本は多く、当館には他に伝飛鳥井雅永写『後鳥羽院遠島御百首』（江戸初期、請求番号二〇一・〇三四二）が所蔵されている。また版本には文政七年版および刊年不明版があり、近世には広く流布していたと考えられる。

後鳥羽院は藤原定家の影響を強く受けた新風和歌の歌人であり、特に土御門天皇への譲位後はたびたび歌合を主催、和歌所を設置するなど、精力的に活動した。また『新古今和歌集』撰進を命じたのは広く知られるところである。承久の乱によって隠岐へ流されてのちも『新古今和歌集』から

さらに抄出した隠岐本『新古今和歌集』を編み、『時代不同歌合』を選び、『遠島御歌合』を主催、そして『遠島御百首』を詠ずるなどして、ますます和歌へと傾倒したとされる。

本資料の料紙は他の資料に比べて一回り小さいが、筆跡から見て宮崎成身の手によるものであると思われる。

【書誌】

内題・「後鳥羽帝遠島百詠」

墨付丁数・四二丁

料紙・楮紙（半葉二二・五糎×一五・五糎）

行数・一一行

印記・「図書局文庫」「日本政府図書」（一才）

【写年・書写者】

本資料は元奥書によれば、天和元年に宝井其角によって書写された本を、文政十三年に宮崎成身が写したものであるらしい。

元奥書は以下の通り。

「天和辛酉折木仲旬於南葉亭／誦唱之暇漫採筆而正月写畢／榎氏狂雷堂其角」

さらに其角の三つの印が朱書で写されている。

成身による奥書は以下の通り。

「文化十三丙子年季春得門生桜井／又蔵所蔵之本而書写畢／紀成身（花押・朱書）」

弟子の桜井又蔵の蔵書であった其角本を写したものであるらしい。「紀成身」とあるのは、宮崎成身の本姓が紀氏であることによると思われる。

ただし、この奥書は墨書で囲まれており、さらに上から「ヌキ」と記されていることから、清書の段階で省くことを想定したのだと思われる。

【五一】はゝこ草 写年不明

続初集之二 「請求番号二一七・〇〇三四（一〇二）」

本資料は『甲子夜話続編』巻二八からの転写で、大火によって炎に巻かれた母親が、継子である長子を助けた話。『甲子夜話続編』巻二八は、文政一二年三月の大火について詳細な記事を載せている。

本資料の冒頭には「北村法眼か記したりしはゝこ草と題したる和文あり借写してこゝに移す」とあるが、同名の書籍は『国書総目録』では確認できないため、『甲子夜話続編』からそのまま転写したことが想像される。題の「はゝこ草」とは、「母子草」の意で、春の七草にも数えられるゴギョウのこと。本資料の内容が母子にまつわるもののため、この題が採られたと思われる。本資料では、一度料紙に「甲子夜話続編」と墨書した上に、貼紙（七・五糎×一・三糎）で「はゝこ草」と修正がなされている。（一才）

神田川沿いから出火した火事に巻かれ、八丁堀に住まいしていた母とその幼い子供ふたりが川を渡って逃げようとするものの、二人を連れては渡りきることができないと考えた母親は、思案の末、まず、長子を背負って渡り、末子を岸に残した。しかし、末子を助けようと引き返したときには、炎が迫り、助け出すことができなかった。実はこの助けた長子のほうが継子で、末子のほうが実子であった。母親は末子を残してきたことを後悔したが、偶然にもひとりの男がこの子供を助け、避難先を捜し当てて、母親のもとを訪れた。この男は家財道具を抱えて川を渡って逃げようとしていたが、子供が取り残されているのを見て、家財を捨ててこの子を背負って逃げたのだという。母親はこの男に深く感謝し、末子との再会を喜んだ。

末尾にこれに関する和歌二首が付される。

なお、本資料の料紙は、他の資料に比べて横幅が三・三糎ほど大きく、小口が内側に折り返された状態で綴じられている。また「図書局文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」の印記が本文末尾（四ウ）にあるが、これは本資料が続初集之二の末尾に相当するため。

【書誌】

内題・「はゝこ草」（『甲子夜話続編』と墨書した上に貼紙で修正）

墨付丁数・四丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇糎×一九・〇糎）

行数・一〇行

印記・「図書局文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五二】俳諧前句附附歌仙 写年不明

続初集之七 「請求番号二一七・〇〇三四（一〇七）」

元禄年間に両鳧堂梨節が編んだ俳諧書『反古さらへ』を書写したものの前半には前句付、後半には歌仙絵風に図案化した俳諧師の挿絵がある。『反古さらへ』の版本は、東京大学や天理図書館などに所蔵されているが、あまり数は多くない。本資料では内題が「俳諧前句附」となっているが、墨書の上から朱書でなぞってある点などからみて後補と思われる。

前句付は、雑俳様式の一つで、七・七の十四音、または五・七・五の十七音に付句をする様式だが、多くは十四音に付される。元は連歌から発生

し、俳諧の習練のために行われてきたものだったが、享保頃に初代川柳に影響していわゆる川柳狂句の発祥へとつながっていき、また元禄頃に遊興的性格が強まって広く流行を迎えた。

本資料はこの前付が古くから行われていたことを説いており、後嵯峨院や源頼義、西行らに仮託した前付を載せている。

本資料の後半部分には「歌仙」(五才)と題して、歌仙絵風に俳諧師の肖像が描かれている。守武朝臣(荒木田守武)、宗鑑(山崎宗鑑)、八千代(八千代太夫)、長頭丸(松永貞徳)、匂当望一(杉木望一)、梅翁(西山宗因)の六名で、六歌仙になぞらえてある。(五才〜五ウ)

また左右十八番ずつ、著名な俳諧師の句が、色紙上に書かれたように配置されている。一頁につき九句、八頁四丁あるので全部で七十二句。(六才〜七ウ、九才〜一〇ウ)

料紙は他の資料に比べてやや小さく(二三・三糎×一六・三糎)、頁によって字高も違う。一才〜四ウは一六・〇糎、八才〜八ウは一三・〇糎、一才は一四・五糎、一ウは一六・〇糎。前半の前付と後半の挿絵以降の部分に関しては別筆に見える。

【書誌】

内題・「誹佞前付」(一才)

墨付丁数・一二丁

料紙・楮紙(半葉二三・三×一六・三糎)

行数・一〇行

字高・一六・〇糎(一才〜四ウ)、一二・〇糎(八才〜八ウ)、一四・五糎(一一才)、一六・〇糎(一一ウ)

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五三】十體百首和歌 白蓉軒桂谿 写年不明

続二集之五 「請求番号二二七・〇〇三四(一一五)」

本資料は白蓉軒桂谿による百首和歌で、十体(十種の和歌の形式)を十首ずつ詠んだもの。十体は歌論書『毎月抄』や『定家十体』で掲げられたものに基づく。

十体とは、幽玄体・長高体・有心体・事可然体・麗体・見体・面白体・濃体・有一節体・拉鬼体で、本資料は概ねこれに倣っている。(本資料の本文では「鬼拉体」)

作者の白蓉軒桂谿は、『視聴草』二集之三所収の「詠百首和歌」の作者でもある。京の男山の庵に住んでいた僧で歌人、寛政七年には江戸に下り、下谷御徒町に住んでいたとも言われている。堂上歌人との深い交流があったとされる歌人で、著作には本書の他に『一日の柴折』、『松戸詠草』などがある。天保二年に没した。

本資料は、他の資料に比べて料紙(半葉二二・五糎×一六・〇糎)がやや小さく、同じ楮紙だがわずかに質も異なる。

本資料に写年・書写者の奥書はなく、また印記もないため来歴は不明。筆跡からすると宮崎成身によるものか。

一才には内題「十躰百首和歌」とあり、その下に「白蓉軒桂谿」とある。いずれも墨書。

【書誌】

内題・「十躰百首和歌」(一才)

墨付丁数・一一丁

料紙・楮紙(半葉二二・五糎×一六・〇糎)

行数・一〇行

字高・一八・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五四】柏木右衛門桜物語 写年不明

続二集之五 「請求番号二一七・〇〇三四(一一五)」

本資料は仮名草子『武蔵国柏木右衛門桜物語』を写したもので、江戸柏木村の円照寺の「右衛門桜」の由来について語ったもの。作者ならびに刊年も不明だが、早稲田大学図書館には、大田南畝・石塚豊芥子・田中蛇湖・横山重旧蔵の版本が所蔵されている。他には国立国会図書館には写本が、また当館所蔵資料の『墨海山筆』(請求番号:二一七・〇〇三一(一一五))の中にも所収されているが、伝本は少ない。

「右衛門桜」は、江戸柏木村の円照寺にあった桜で、「正保城絵図」や『江戸名所記』など様々な文献にその名を見ることができる。「右衛門桜」の名前の由来には諸説あり、『源氏物語』の登場人物である柏木(右衛門督)に由来する、または接ぎ木をした者の名前が武田右衛門であったなど、近世当時から様々に伝えられてきた。

仮名草子『武蔵国柏木右衛門桜物語』はそのうち、平忠常の乱の平定に功績のあった柏木右衛門佐頼季に由来すると述べた内容。頼季は戦の恩賞

として武蔵国柏木と角筈の地を下賜され、そこに館を建てて桜を植えたことから、その地の桜が「右衛門桜」と呼ばれるようになったというものである。この内容は後世の創作と考えられている。

本資料の料紙は他の資料に比べてやや小さく(半葉二三・〇糎×一六・〇糎)、前掲の資料と比べるとやや背が高い。

本資料に写年・書写者の奥書はなく、また印記もないため来歴は不明。筆跡は前掲資料とは別筆。

一才には内題「柏木右衛門桜物語」とあるが、元は「武蔵国柏木右衛門桜物語」とあったものを、上から貼り紙をして「武蔵国」を消してある。

【書誌】

内題・「柏木右衛門桜物語」(一才)

墨付丁数・一〇丁

料紙・楮紙(半葉二三・〇五糎×一六・〇糎)

行数・一〇行

字高・一八・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五五】御連歌濫觴 写年不明

続二集之五 「請求番号二一七・〇〇三四(一一五)」

毎年正月一日に江戸城で行われていた連歌の興行(「江戸城連歌始」あるいは「柳宮連歌始」とも)について、その起源を述べたもの。本資料に

よれば、天文一二年二月一日、三河国岡崎城において松平広忠が始めたのが最初で、その吉例によって後世まで続いたとする。また大浜村の称名寺で其阿（浅草日輪寺其阿）と交わした連歌や、それに唱和した竹千代君（のちの徳川家康）のものとされる句が記されている。他、江戸城内での連歌の歴史や歴代仕えた連歌師などの由緒が記される。

なお、本資料の内題は一才に墨書で「御連歌濫觴」とあるところから採られているが、その下にも朱書で同様に「御連歌濫觴」とある。但し、この朱書の内題のほうは、上から貼紙をされて訂正されている。また四ウの本文末尾にも、貼紙による訂正が見られ、朱書で「殿中異礼」とあるのを上から貼紙で消している。

本資料の料紙は前掲資料と同一のもので、ほぼ同じ時期に書写されたものと見られる。但し、別人の筆によるものと思われる。

本資料の成立年代ははっきりしないが、本文中に登場する年記で最も新しいものが「寛政十二年申十二月」であることから、少なくともそれ以降と考えられる。

【書誌】

内題・「御連歌濫觴」（一才）／朱書「御連歌濫觴」（一才）

墨付丁数・四丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇五糎×一六・〇糎）

行数・一〇行

字高・一七・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五六】東海道夷歌 手柄岡持 写年不明

続二集之六 「請求番号二一七・〇〇三四（一一六）」

本資料は狂歌師の手柄岡持（朋誠堂喜三二／平沢常富）による狂歌集で、享和三年に『東海道』あるいは『東歌夷道』などの書名で出版されたものからの転写。あいいうえおの五十音を基に、それぞれの文字を一首に多く詠みこむという趣向で、歌もあいいうえお順に配列されている。

本文冒頭に凡例が付されており、それによれば、や行のうちの「い」と「え」、わ行のうちの「う」を省略したため、全部で四七音。そこに、は行の音を「わいうえお」と読む場合と「む」の字を「ん」と読む場合を加えて計五三首とした。

内題が「東海道夷歌」であるのは、本資料の五三首と東海道の宿場が五三か所であることをかけたもの。本資料の場合一才にこの内題（墨書）がある。最初に書き損じた見え、上から貼紙をして訂正されている。

作者の平沢常富は、秋田藩の江戸留守居役を務めた武士であったが、同時に朋誠堂喜三二の筆名で数多くの黄表紙を上梓した戯作者でもあった。天明年間の「天明狂歌」流行の折には、手柄岡持や浅黄裏成などの名で活躍し、本資料にも手柄岡持の名が記されている。この他にも多くの筆名・号を持ち、洒落本では道陀楼麻阿、俳号では月成、狂詩では韓長齡などを使い分けていた。二十代のころには吉原に出入りし、「宝暦の色男」を自称した。安永年間に入ると、友人の恋川春町の挿絵で黄表紙を発表し、流行の草分け的存在となる。その後も数々のヒット作を生み出すが、寛政の改革を風刺した内容の『文武二道万石通』で主家の怒りを買って、事実上、黄表紙からは手を引くことになったといわれている。しかし、江戸留守居役

として諸藩の知識階級と交流し、大田南畝・宿屋飯盛ら文人たちとも親しく交わって、狂詩・滑稽本・噺本の世界へも手を広げた。文化一〇年に七九歳で没するまで、広い分野に数多くの著作を残している。

本資料は、享和三年に出版された版本からの転写であることがわかる。奥書には以下の通りある。

「右五十三首は岡持ぬしわれに見よとてをこせられしをたれ／かれも見せまほしく侍れとあまた書写してんも煩しければ／そのぬしにもいはてなくり書のまゝを桜木にえりつくる／ことになりぬ／享和三癸亥年四月／松下堂蔵」

本資料は版本の奥書もそのまま転写している。

本資料の料紙は、四周单边・有界の原稿用紙で、匡郭と界が藍色で刷られている。版心には単魚尾（白魚尾）で、丁付や版心題はない。

【書誌】

内題・「東海道夷歌」（一才）

墨付丁数・六丁

料紙・楮紙（半葉二二・五糎×一六・五糎）、

匡郭・四周单边（半葉一八・〇糎×一三・三糎）、有界

行数・一一行

字高・一八・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五七】新撰百人一首 網野延平 写年不明

続二集之十 「請求番号二一七・〇〇三四（二二〇）」

本資料は、歌人の網野延平の撰による百人一首で、嘉永五年版からの転写。本資料の内題（一才）は「源延年新撰百人一首」となっているが、これは「源延平」の誤写。影印版の『内閣文庫所蔵史籍叢刊第二 視聴草』（巻十、汲古書院）の目次も「新撰百人一首（源延年編）」となっているが、この内題に基づいている。網野延平の本姓は源氏。

冒頭の延平の序文によれば、藤原定家の『小倉百人一首』に倣い、のちの世に伝えるべき百首を選んだという。歌人は公卿殿上人を中心とし、後醍醐天皇をはじめに光格天皇まで。『小倉百人一首』以降の南北朝時代から江戸時代後期までの人物を選んでいる。人物に関しては、後半部分に人名目録が付されており、略歴が載せられており、この部分は版本と体裁も同じである。

本文に関しては、嘉永五年版では、半葉に一首、和歌懐紙を意識した体裁で書かれているのに対し、本資料では一行に一首にまとめられている。

撰者の網野延平は、仲田顕忠・鈴木重嶺に学んだ歌人で、江戸日本橋で卜占を副業としながら子弟の教育に当たった人物である。はじめは笠倉延と名乗っていたが、御三卿田安家に仕えていた網野家に養子に入り、網野延平と名乗る。明治二二年に七一歳で没した。嘉永五年に本資料を出版したときは三一歳。

本資料に奥書はないが、序文に嘉永五年版と同じ年記がある。

「嘉永五とせといふとしのきさらきはかり／源延平しるす」

本資料の料紙は他の資料に比べて一回り小さく（二二・五糎×一六・五糎）、薄様で他の楮紙とは質感がやや異なる。筆跡も他の資料とは別筆に見

える。

【書誌】

内題・「源延年新撰百人一首」(一才)

墨付丁数・一五丁

料紙・楮紙(半葉二二・五糎×一六・五糎)

行数・一〇行

字高・一八・八糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五八】おきく物語 写年不明

続二集之十 「請求番号二一七・〇〇三四(二二〇)」

本資料は一七世紀末ころに成立したと考えられている軍記物語『おきく物語』の写本。天保八年に江戸の和泉屋金右衛門によって出版されたものの転写。別名に『浪華城菊物語』。

「おきく」は、岡山池田藩の医師である田中意徳の祖母。親族が浅井長政の家臣であったことから、幼少期から淀殿に仕えていたという。『おきく物語』は意徳からの伝聞形式で、おきくの視点から大坂落城当日の様子や京都への逃避行などが生々しく描かれている。

下女にそば焼きを作るよう命じたところ、落城寸前という知らせを聞いたおきくは、家臣たちの制止を振り切って大坂城を脱出する。打ち棄てられた豊臣の馬印である金の瓢箪などを目の当たりにし、さらには、追剥に

遭遇して竹流し金を奪われる。だがようやく要光院殿(お初、淀殿の妹)の一行に出会って匿われ、ついに京へと逃げ延びる。

内容の信憑性はやや疑われるものの、女性の視線で語られるリアルな戦場の様子は貴重で、同様に石田三成の家臣の娘であった「おあむ」の壮絶な体験を記した『おあむ物語』と合冊で出版されている。『おきく物語』ではおきくの没年を延宝六年としているので、成立は少なくともその後と考えられる。

天保八年版では漢文の跋文が付せられているが、本資料にそれはない。本資料の料紙は、他の資料に比べて一回り大きく(一丁目・半葉二三・五糎×二七・五糎、二丁目以降・半葉二三・五糎×二〇・〇糎)、表紙からはみだした小口部分は内側へ三糎ほど折り返されている。一丁目だけが、他の丁に比べて横が大きい。

また全七丁のうち、最初と最後の一丁ずつが、袋綴になっておらず、片面だけに書写されている。別の本から切り取られたか。

【書誌】

内題・「おきく物語」(一ウ)

墨付丁数・七丁

料紙・楮紙(一丁目・半葉二三・五糎×二七・五糎、二丁目以降・半葉二三・五糎×二〇・〇糎)

行数・一六行(一丁目)、一一〜二行(二丁目〜六丁目)

字高・二一・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【五九】蓮光院殿紫語和歌 写年不明

続三集之一 「請求番号二一七・〇〇三四（二二一）」

徳川家治の室で、世子家基の母であった蓮光院（お知保の方）による和歌で、『源氏物語』の巻名に従って詠んだ巻名詠歌。全五五首。（全五四帖のうち「若菜」は上・下があるため全五五首）

お知保の方（お智保の方とも）は幕臣津田信成の娘で、徳川家重の御次として仕えたが、家治の正室である倫子女王に男児が授からなかったことから、家治の御中臆として召し出され、世子となる家基を産んだ。家基は倫子女王のもとで養育されたが倫子女王が亡くなったことから、お知保の方が御部屋様となって家基を育てた。家基が継嗣として次の將軍と目されていたため、家基が鷹狩に出掛けた際に急死しても、お知保の方は將軍生母に準ずる扱いを受けていたとされる。家治が没した際に落飾し、蓮光院と号した。寛政三年に五三歳で死去。

本資料は『源氏物語』の巻名に従って詠んだ巻名詠歌。成立年代ははっきりしない。内題の「蓮光院殿紫語和歌」（墨書）は後補と見られる。

本資料の料紙は他の資料に比べてかなり小さく（半葉一九・五糎×二一・五糎）、半葉に二首ずつ記されている。書写者は不明だが能書である。

【書誌】

内題・「蓮光院殿紫語和歌」（一才）

墨付丁数・一四丁

料紙・楮紙（半葉一九・五糎×二一・五糎）

行数・六行

字高・一四・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【六〇】女房艶語合 写年不明

続三集之四 「請求番号二一七・〇〇三四（二二四）」

女房達の恋文を左右に分けて、判詞をつけて歌合の形式にした「艶書合」のひとつ。全十番。同名の資料は宮内庁書陵部や彰考館に所蔵があるが、徳川斉昭が天保年間に編んだ叢書『八州文藻』のうちに所収されている。

「艶書合」で著名なものには、康和四年に堀河院のもとで行われた『堀河院艶書合』があるが、これは男女が恋の歌を送り合う形式で催された。本資料の場合は、和歌ではなく恋文で左右の優劣を競っている。

序文では『宇津保物語』や『源氏物語』の例を引き、恋文や恋歌の由緒を述べている。全十番に作者・判者の名はなく、成立年代も不明。

本資料の料紙は薄様の斐楮混ぜ漉き紙で、袋綴になっているが、第一丁のみ、半葉しかない。別の本から切り取られたためと思われる。また、他の資料に比べてやや小さい（二三・三糎×一六・〇糎）。筆跡は能書だがかなり特徴がある。

【書誌】

内題・「女房艶語合」（一ウ）

墨付丁数・一六丁

料紙・斐楮混漉紙（半葉二三・三糎×一六・〇糎）

行数・一二行

字高・一七・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【六一】浜の松風 筒井政憲 写年不明

続三集之五 「請求番号二一七・〇〇三四（一二五）」

幕臣の筒井政憲が記した、天保五年に第一代將軍徳川家斉に従って浜御殿に遊んだときの記録。庭園の風景と詩歌が記されている。無窮会図書館神習文庫に自筆本が所蔵されている。また『江戸名園記』にも収録。

本文によれば、幕臣たちに浜御殿の庭園を見せてやりたいという家斉直々の希望によって、当時の幕閣ら二二人が浜御殿に招かれたという。

浜御殿は第六代將軍家宣のときに大幅な改修が行われ、このとき庭園も整備された。享保九年の大火で一時は荒廃するが、家斉の治世に新たな整備が行われ、鷹狩の場としても使われた。本資料にはその庭園の景物が描写され、漢詩・和歌ともに載せられている。

作者の筒井政憲は幕末にプチャーチンとの交渉に当たった人物として知られている。旗本の久世広景の三男に生まれたが、同じ旗本の筒井家に養子に入った。目付、長崎奉行、江戸町奉行、西丸留守居、学問所御用などを歴任。儒者でもあり、將軍家斉に『論語』を講じたこともある。二度のプチャーチン来航時には、応接掛として川路聖謨と共に対応するが、儒役はそのままに大目付格（海防掛）に抜擢された。日露和親条約締結に尽力するなど、有能な官吏であったのも勿論だが、人望も厚かったとみえ、「名

奉行」と評されることが多い。安政六年に八二歳で没。

本資料の元奥書は「天保いつゝのとし葉月のすゑ 筒井伊賀守／藤原政憲／しるす」とあるため、本資料の成立が天保五年八月末であることがわかる。

本資料は他の資料に比べて縦横共に小さい（半葉二一・七糎×一四・五糎）。内題の「浜の松風」は朱書（二才）。

【書誌】

内題・「浜の松風」（一才）

墨付丁数・一六丁

料紙・楮紙（半葉二一・七糎×一四・五糎）

行数・九行

字高・一八・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【六二】小野山にてよめる百首 加藤等空 写年不明

続三集之八 「請求番号二一七・〇〇三四（一二八）」

本資料は京都大原の小野山で詠んだ和歌百首。作者は和学者であった加藤磐齋（等空）。小野山は磐齋の隠棲した場所である。

本資料には詞書はほとんどなく、百首が連ねられている。部立は書かれていないが、内容からみれば、春夏秋冬雑の『古今和歌集』の配列に倣っていることが窺える。

加藤磐齋は『土佐日記見聞抄』『清少納言枕草子抄』『方丈記抄』などの古典注釈を多く残した和学者である。摂津に生まれ、比叡山で修行を積んだのち市井に戻るが、理由は不明ながら結局は妻子を捨てて小野山へと隠棲した。それからは、漂泊の旅を繰り返して、紀行文も多く残している。寛文五年以降には摂津に戻った。号は、磐齋のほかには等空や冬木翁など。和歌・歌学のほか、儒学・詩文・神道・俳諧などに精通していた。俳諧の師は松永貞徳で、近隣に住んでいたよしみで幼少期から学んだ。儒学の師は松永尺五、詩文の師は石川丈山である。北村季吟とも市井にあつた頃から交流があつた。延宝二年に五〇歳で没。ただし、享年には諸説ある。

著作のほとんどが古典注釈を占め、詠作はあまり多くない。本資料はその多くない和歌のうちのひとつである。成立年代ははっきりしないが、摂津山田に移住した寛文五年頃より以前であると思われる。

本資料の内題は一才に「加藤盤齋小野山百首／小野山にてよめる百首」（墨書）とあり、その下に続いて作者名として「磐齋」とある。

本資料の料紙は、他の資料に比べて縦が少し短く（二三・三糎×一六・五糎）、また九丁目の袋綴が開いている状態になっている。九丁目に関してはウラに当たる部分が半分切り取られている状態で、横八糎分が内側に折りこまれている。他の写本から本資料が切り取られたためと思われる。

【書誌】

内題・「加藤盤齋小野山百首／小野山にてよめる百首」（一才）

墨付丁数・九丁

料紙・楮紙（半葉二三・三糎×一六・五糎）

行数・一二行

字高・一七・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠いているため写年・書写者ともに不明。

【六三】若むらさき 元禄四年刊

続四集之二 「請求番号二一七・〇〇三四（一三三）」

本資料は元禄四年に出版された絵入りの歌集で、編者は了然尼。版本がそのまま綴じられているが、第一丁と第二三丁が欠けており、「二十四」の丁付の入った丁から始まる。

もとは江戸の名所案内である戸田茂睡の『紫の一本』（天和三年跋）に紹介された歌集で、この部分を抜粋し、独立した一書として元禄四年に出版したのが本書である。

和歌の作者は江戸の大名・旗本・僧侶・医師などで、戸田茂睡の他の撰集と共通する作者も多い。というのも、これは編者であつた了然尼が直接茂睡に本書を託し、『紫の一本』で紹介されたという点から見ても、両者の交友関係が共通した武家歌壇にあつたためだろうと考えられる。出版されたのも上方ではなく江戸であり、土地柄としての必然性もある。内容は素朴な和歌が多く、「稚拙な技術的欠陥を幾つも含むのであるけれども、江戸開幕以来ようやく八十余年にして生まれた、はじめての武家中心の刊本歌集だった」（上野洋三『若むらさき』の歌風『文学』六・三号、一九九五年）と評価されている。

編者の了然尼は、俗名を葛山ふさといい、武田信玄には玄孫に当たる人物で、「やどり木」という女房名で東福門院の御所に出仕していた。のち、医師の松田晩翠に嫁すが、出家を願って離別した。本資料の本文にもある

が、江戸に下つて黄檗宗の僧の白翁道泰に従うことを願ひ出るが、白翁に容貌が華美であることを理由に入門を固辞されたため、焼けた銅の器を顔に押し当てて出家の覚悟を示したという。この事件は当時からすでに有名な出来事であつたようである。武蔵落合村泰雲寺を開き、白翁を勧請開山とすると、二代住持となつた。正徳元年に六六歳で没。

詩歌・書を能くした了然尼は当時を代表する文人のひとりでもあり、交流のあつた戸田茂睡は特に当時の武家歌壇を牽引した旗本であつた。

本資料は版本の前半部分が欠けているため、内題がない。その代わり、「若むらさき并了然尼」と墨書された紙片（一五・七糎×二・〇糎）が、一才の手前に一緒に綴じられている。

料紙は他の資料に比べてかなり小さい（一六・〇糎×一一・〇糎）。本文は每半葉九行で、字高一二・〇糎。挿絵部分にのみ匡郭がある（一二・〇糎×九・〇糎）。本資料の挿絵は四図（八ウ・九才・一三才・一九才）で、彩色が施されているが後補と思われる。

【書誌】

内題・「若むらさき并了然尼」（紙片一五・七糎×二・〇糎）

墨付丁数・二二丁

挿絵枚数・四図（八ウ・九才・一三才・一九才）

匡郭・本文なし（挿絵・一二・〇糎×九・〇糎）

料紙・楮紙（半葉一六・〇糎×一一・〇糎）

行数・九行

字高・一二・〇糎

印記・なし

【刊年・刊行者】

なお奥書は以下の通り。

「此若むらさきはむらさきの一本より（二一才）／出たるゆへ名付侍り了然か撰の／うち少々除きくはへて板に開く者也（二一ウ）／元禄四辛未歲立春日」

これによれば『紫の一本』に掲載した内容に手を加えて、編集したものを『若むらさき』としたことがわかる。

版元名の記載がないため、刊行者は不明。

【六四】宗祇追悼之記 宗長 写年不明

続四集之三 「請求番号二二七・〇〇三四（一二三）」

本資料は一般的に『宗祇終焉記』の題で知られる宗長の紀行。当館所蔵の林家旧蔵本は『宗祇臨終記』（請求番号二〇四・〇一九七）の内題で知られる写本だが、本資料とは奥書に違いがある。なお『内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二 視聽草』第一巻（汲古書院、一九八五）の目次には『宗祇追悼之記（宗長道記）』とあるが、『宗長道記』は宗長による別の紀行文の書名である。本資料一ウの奥書に「宗長道記」とあるため、混乱が生じたものか。『宗祇終焉記』は箱根湯本で客死した宗祇と同道した宗長がその一連の流れを紀行文として描いたもの。文亀二年成立。

文亀元年、宗長は宗祇の滞在していた越後国府を訪れ、翌年二月から草津などを遍歴し、江戸・鎌倉を経てから箱根湯本まで赴いた。しかし、いよいよ翌日には箱根越えというときに、それまで病氣療養をしていた宗祇の容態が悪化して、そのまま没した。遺骸は輿に乗せられて足柄を越え、桃園の定輪寺に葬られた。本書は、京に住む宗祇の知人たちにその最期の様子を伝えるため、記されたものである。

宗長は、宗祇門下の連歌師で、肖柏と並び称された人物である。若くして今川義忠に仕えたが、義忠の戦死後に今川家を辞して上洛、一休宗純に参禅、宗祇に師事した。そのうち三条西実隆らに学び、明応五年に駿河に帰国して今川氏親に仕えた。宗祇の没後も諸国を回り、多くの紀行文を残している。著作は数多く、連歌句集、論書、日記など枚挙に暇がない。『実隆公記』によれば享禄五年に八五歳で没した。

本資料は斐楮混漉の薄様の料紙で、大きさは他の資料に比べてやや小さい(半葉二三・四糎×一六・〇糎)。内題は一ウに「宗祇追悼之記」とある。

ただし、第一丁目に関しては、袋綴になっておらず、一才に相当する半葉が欠けた状態。末尾に当たる第一一丁目もまた、一一ウの半分が欠けた状態であることから見て、他の本から本資料の部分だけが切り取られたものと見られる。

【書誌】

内題・「宗祇追悼之記」(一ウ)

墨付丁数・一一丁

料紙・斐楮混漉紙(半葉二三・四糎×一六・〇糎)

行数・一二行

字高・一七・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料の奥書は以下の通りである。

「右宗長道記畢／次 一品宮智仁親王御筆之御本於四／箴堂下写／于時寛文三曆夷則初十一日 大順軒 曳尾道人書／右貞享甲子秋九月廿六日夜写之」

これによれば貞享四年に書写された時の奥書だとわかるが、本資料の状

態から見て当時のものとは考えにくく、元奥書とみて良いだろう。

奥書の中の「一品宮智仁親王」は、後陽成天皇の弟の八条宮(桂宮)智仁親王のことである。和歌・連歌に通じ、また古典籍の収集・書写にも力を注いだ。

【六五】大樹寺開木詩歌 写年不明

続五集之一 「請求番号二一七・〇〇三四(一四〇)」

本資料は三河大樹寺の什物「御貫木神」開帳の際に奉納された詩歌。『内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二 視聽草』第一二巻(汲古書院、一九八五)の目次では表題が「大樹寺開木詩歌」となっているが、これは本資料一才に後補された内題で、もとは「奉称御貫木神詩歌」(一才・墨書)である。一才には「奉称御貫木神詩歌 二箱之内 一軸／大樹寺御貫木神奉納和歌」とあり、三才にも「奉称御貫木神詩歌 二箱之内 一軸」とある点から見て、元は二軸の卷子本であったことが窺える。

大樹寺は松平親忠によって創建された松平家・徳川將軍家の菩提寺である。歴代將軍の位牌が納められていることでも知られる。

桶狭間の戦いの折、今川方として敗走した徳川家康(松平元康)は、この大樹寺に逃げ込み、自刃しようとしたところを留められ、大衆たちが敵を相手に奮戦したと伝えられる。このとき、大力無双の祖洞なる法師が、門の貫木を引き抜き、奮戦し敵を退散せしめたといわれ、このときの貫木が徳川家康を救った貫木として、現在も「御貫木神」として祀られている。

この「御貫木神」には、家康の刀傷があるともいわれ、度々、江戸で開帳されることがあった。それが表題にいうところの「開木」である。本資

料はこの江戸の出開帳の折に奉納された詩歌をまとめたもの。
名を連ねているのは幕臣が中心である。

本資料の料紙は他の資料に比べてやや高さが足りず（半葉二三・五糎×一六・五糎）、色もやや黄色味が強い。

【書誌】

内題・「大樹寺開木詩歌」（一才・墨書）

墨付丁数・九丁

料紙・楮紙（半葉二三・五糎×一六・五糎）

行数・一〇行

字高・一八・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。ただし本文中の年記に「文政乙卯秋八月」というものが見え、書写されたのは少なくとも文政二年以降であると考えられる。

【六六】関口水神会歌 写年不明

続五集之一 「請求番号二二七・〇〇三四（二四〇）」

文化八年の中秋の名月の折、神田上水の関口水神で催された歌会の兼題和歌集。

一才には「文化八未中秋十六日関口水神龍隠庵にて笹川うし之催」とある。関口水神は、神田上水開削の際に祀られた関口水門の守護神社である。龍陰庵はこの開削工事に参画した松尾芭蕉が住んだところとも言われ、現

在は「関口芭蕉庵」と呼ばれるが、諸説あって判然としない。一才の記述によればこの龍陰庵で歌会を主催したのは、幕臣の笹川長運。

内題は一才に「関口水神会歌」（朱書）と後補されてあるため、『内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二 視聴草』第二二卷（汲古書院、一九八五）の目次にはこの表題が採られているが、実際には幕臣の大草公弼が主催した十月二日の会（「十月二日兼題」四ウ、「右文化八未初冬二日公弼うし会歌」六才）、小野高潔が主催した一〇月七日の会（「十月七日兼題」四ウ、「右小野先生会歌」八才）、内方恒忠が主催した十二月二日の会（「十二月廿二日兼題」六ウ、「右恒忠主会歌」一一才）、「中正月二十四日桜園兼題」（「一ウ」）などの歌集が共に収録されている。料紙や筆跡が同一である点から見ても、同時期に同一人物に書写されたと考えられ、『視聴草』に合綴される際にもそのまま一緒に綴じられてしまったと想像される。

名を連ねているのは、幕臣で国学者でもあった大草公弼や小野高潔をはじめ、内方恒忠、斎藤理順、富永本稠、大田対郷、押山安富など、江戸後期の幕臣たちである。当時の幕臣たちの歌壇の様子がうかがえる貴重な資料である。また彼らの夫人や娘など女性たちの名前も見える。

以下、収録されている資料の一覧。

- ・「関口水神会歌」（笹川長運主催）：一才〜四才
- ・「十月二日兼題」（大草公弼主催）：四ウ〜六才
- ・「十月七日兼題」（小野高潔主催）：六ウ〜八才
- ・「十二月廿二日兼題」（内方恒忠主催）：八ウ〜一一才
- ・「中正月廿四日桜園兼題」：一一ウ

料紙の大きさは前掲資料とほぼ同じ（半葉二三・五糎×一六・五糎）だが、他の資料や表紙と比較すると一回り小さい。

【書誌】

内題・「関口水神会歌」(一才・朱書・後補)

墨付丁数・一六丁

料紙・楮紙(半葉二三・五糎×一六・五糎)

行数・一〇行

字高・一八・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。少なくとも文化八年以降。

【六七】古学先生和歌集 伊藤仁斎 文化十三年写

続五集之三 「請求番号二一七・〇〇三四(一四二)」

元禄一六年に成立した儒学者伊藤仁斎による和歌集。「古学先生」は仁斎の諡号。写本・版本ともに伝来が多く、特に甘雨亭叢書のうちの一冊として伝わったものが多い。

伊藤仁斎は、それまでの朱子学の解釈を否定し、古義学を成立させた儒学者である。京都堀河で生まれ、一〇代から朱子学を中心に仏典を中心とした漢籍を学んだ博学の人で、病気が原因で一時は隠棲したものの、寛文一一年の大地震をきっかけに堀河の自宅に帰ると、私塾「古義堂」を開いた。朱子学が仏教・道教的価値観での解釈を加えた儒学であることを批判し、孔子・孟子の本来の教えに立ち返るべく、『論語』『孟子』のテキストを重視して、実践道徳を主張した。古義堂には農民から公卿まで広い階層の人々が集い、その著作『論語古義』『孟子古義』『中庸發揮』などは世に

大きな影響を与え、朱子学派の内省を促し、さらには荻生徂徠の古文辞学など新しい学派につながっていく。漢籍・和歌に早く親しんでいたこともあり、『古学先生文集』『古学先生詩集』などの漢詩文の著作に加え、本資料のような和歌集も残されている。

本資料の内題は「古学先生和歌集」(墨書)とあるが、後補とみられる(一才)。さらに、その下には宮崎成身の蔵書印である「宮崎文庫」の印が押されている。本資料の料紙は、他の資料に比べて高さがやや足りない(半葉二二・五糎×一六・五糎)が、すべて同じ料紙で筆跡も同一。

冒頭は寛政一二年の年記を持つ平勝審の仮名序(一才ウ)と、延宝六年の年記を持つ真名序(二才ウ三才)。

さらに本資料には以下の通りの元奥書がある。(三才オ)

「跋先故遺墨 湖上朝霞 野往霞 鶯ノ此先故手澤也。真境所値。矢口成言。薦紳家其ノ必取之矣。感愴敬題。享保乙卯九月日」

「書先子遺詠後ノ先子平素好誦古歌。時有会意。或自賦不必求合ノ矩度。識者或賞其有自然之趣。越藩医貞无忠ノ氏私淑先子之道。得自書和歌一本。甚珍之。使予ノ題于其尾云。乙巳年三月」

「文化丙寅三月。初四。藩邸罹災。此書幸免。可謂神助。ノ珍之重之。ノ諸葛菜園老丁 勝睿識」

これらすべてが同筆で、本文同様、朱で読点が入られている。

【書誌】

内題・「古学先生和歌集」(一才・墨書・後補)

墨付丁数・三〇丁

料紙・楮紙(半葉二三・五糎×一六・五糎)

行数・一一行

字高・一九糎

印記・「宮崎文庫」(一才・陽刻朱印)

【写年・書写者】

三〇才に以下の通り奥書がある。

「文化十三丙子正月書写畢 紀成身(花押)」

筆跡、花押から見て宮崎成身の自筆と見られる。花押は朱書。

【六八】仙台領地名所和歌 伊達吉村 正徳四年跋刊

続五集之四 「請求番号二一七・〇〇三四(一四三)」

本資料は仙台藩主伊達吉村が編んだ、仙台領内の歌枕を詠んだ名所和歌集。正徳四年の跋を持つ版本がそのままの状態で見られている。自跋の年記から成立は正徳二年。当館に所蔵されている昌平坂学問所旧蔵『仙台領地名所和歌』(請求番号二〇二・〇一六三)と同版に相当する。他に版本としては天保一〇年版が知られる。

伊達吉村は、第五代仙台藩主で、それまで厳しい財政状況に置かれていた藩を立て直したことから、中興の祖とも言われる人物である。役職の整理に始まる内政改革は大きく評価されるが、そればかりでなく吉村は学問の奨励にも尽力し、学問所を設置した。それは、吉村自身が諸芸に通じていたことにもよる。侍講には、田辺希賢・希文父子、大島半隠・俊亮父子がおり、幼少期から学問に通じていた。また、持明院基雄に書を、狩野常信に画を師事する。中でも特に通じていたのは和歌で、その師は清水谷実業・武者小路実陰で、中院通躬に伝を授かった。家集に『隣松集』『統隣松集』などがあるが、著作は詠草をはじめ紀行文など数多く、枚挙に暇がないほどである。寛保三年に致仕。宝暦元年に七二歳で没。

『仙台領地名所和歌』は、仙台藩領内の歌枕を詠んだ和歌集で、実際に吉村と親交のあった中院通躬や冷泉為久の歌が収録されている。なお、詠まれた歌枕は「陸奥山」「末松山」「磐手山」「宮城野」「真野の萱原」「なこそ関」「緒絶橋」「玉造江」「名取川」「玉河」「衣河」「阿武隈河」「奥海」「十府浦」「塩竈浦」「松島」「松賀浦島」「袖渡」「武隈松」の一九箇所で、吉村の跋文によれば、冷泉為綱による出題で、これに応えて各々が一首ずつ詠む形で披露された。

跋文の末尾には「正徳龍集壬辰孟夏之日 左近中将吉村識」(八ウ)とある。

なお、本資料は九才から、塩竈・松島の風景を詠んだ『塩松八景』が付せられる。これは、『仙台領地名所和歌』の正徳四年版の特徴である。ここにも跋文があり、年記は「于時正徳四甲午年仲春季八 羽林中郎將藤原朝臣吉村」(二三ウ)となっている。

一四才からは和歌作者の一覧。官位の順に二〇名。

本資料の料紙は斐楮混漉の厚紙(半葉二四・三糎×一七・〇糎)を用いており、四周双辺(二一・〇糎×一三・八糎)の匡郭を持つ。版心は上部のみ黒魚尾、題「名所」、丁付。

当館に所蔵されている昌平坂学問所旧蔵『仙台領地名所和歌』(請求番号二〇二・〇一六三)に虫損が見られるのに対し、本資料は焼けなども少なく、状態が良い。

【書誌】

内題・「仙台領地名所和歌」(一才)

墨付丁数・一六丁

料紙・斐楮混漉紙(半葉二四・五糎×一七・〇糎)

匡郭・四周双辺(半葉二一・〇糎×一三・八糎)

行数・五行

字高・二一・〇糎

印記・なし

【刊年・刊行者】

巻末の『塩松八景』の跋文の年記「于時正徳四甲午年仲春季人 羽林中郎将藤原朝臣吉村」(二三ウ)によれば、正徳四年頃の刊行。

【六九】墨田河二百首 天保一一年跋刊

続五集之五 「請求番号二一七・〇〇三四(一四四)」

本資料は、幕臣で歌人でもあった小倉実麿の隅田川を詠んだ和歌二百首。小型の版本で、天保一一年跋刊。続五集之五の冒頭にそのまま綴じられている。当館には他にも『墨田川二百首』の写本が『墨海山筆』(請求番号二一七・〇〇三二)に所収されている。

小倉実麿は、林述斎の五男に生まれ、兄に林裡宇、鳥居耀蔵、林復斎がいる。幕臣の小倉隆時の養子に入り、小倉姓を名乗った。文政一二年に小倉家の家督を継ぎ、小普請組に入る。一時、田安家に転じて物頭役、長柄奉行などをつとめ、のち富士見宝蔵番頭などの諸職を経たのち、弘化元年に西丸納戸頭。本姓は源で、字に明原・以葆、号に桜舎。嘉永元年に四七歳で没した。著作はあまり多くなく、歌集で知られているものは本書のみ。

本資料は小型の版本で、半葉二一・〇糎×一〇・〇糎と、他の資料に比べてもかなり小さい。この版面に毎半葉一〇行で、和歌が記されているため、文字もかなり小さい。

一才に「内一二三七一八号」の印記が押されているが、これは内閣文庫

のかつての資料請求番号で、本資料が続五集之五の冒頭に相当するため、この場所に捺印されたもの。

【書誌】

内題・「墨田河二百首」(一才)

墨付丁数・一六丁

料紙・楮紙(半葉二一・〇糎×一〇・〇糎)

行数・一〇行

字高・一〇・〇糎

印記・「内一二三七一八号」

【刊年・刊行者】

巻末の跋文の年記「庚子乃神無月源実麿しるす」(一六才)とある点から、天保一一年跋刊であることがわかる。「源実麿」とあるが、源は本姓。

【七〇】南山和歌集 天和二年写

続五集之六 「請求番号二一七・〇〇三四(一四五)」

本資料は、藤原定家、為家、為定、安嘉門院四条(阿仏尼)らの和歌を、春二〇首、夏一〇首、秋二〇首、冬一〇首、恋二〇首の、雑二〇首の構成で編んだ和歌集。成立の詳細ははっきりせず、伝来写本も少ない。主なものでは彰考館が所蔵している写本があり、藤原定家による『秀歌大体』などと合写されている。

巻末に藤原定家以下、為家までの系図が載せられている。定家の息子が為家であり、その室となった安嘉門院四条(阿仏尼)が為相を産んだ。為定は、為相の異母兄である為氏の孫で、定家には玄孫に当たる。

本書は題詠の形を取っており、それぞれの題は以下の通り。

春は「関路早春」「湖上朝霞」「霞滿遠桜」「羈中間鶯」「賤家竹鶯」「田辺若菜」「野外残雪」「山路梅花」「梅薰夜風」「水辺古柳」「雨中桜花」「野辺当人」「遠望山花」「曉庭前花」「故郷夕花」「河上春月」「深夜帰雁」「藤花随風」「橋辺款冬」「船中暮春」

夏は「卯花隠路」「初聞時鳥」「山家郭公」「池朝菖蒲」「閑居蚊火」「薰橋驚夢」「杜五月雨」「野夕夏草」「閑庭螢火」「行路夕立」

秋は「初秋朝風」「闇月七夕」「野亭夕萩」「江辺曉萩」「山家初雁」「海上待月」「松間夜月」「深山見月」「草露映月」「関路惜月」「鹿声夜友」「田家擣衣」「古渡秋霧」「秋風滿野」「籬下聞虫」「紅葉移水」「山中紅葉」「霧庭槿花」「河辺菊花」「独惜暮秋」

冬は「初冬時雨」「霜埋落葉」「屋上聞霰」「古寺初雪」「庭雪厭人」「海辺松雪」「水郷寒蘆」「湖上千鳥」「寒夜水鳥」「歳暮澗水」

恋は「初尋縁恋」「聞声忍恋」「忍親眺恋」「祈不通恋」「辺旅宿恋」「兼願暁恋」「帰無言恋」「遅不言恋」「契頼事恋」「疑真偽恋」「返事増恋」「夜願賤恋」「途中契恋」「従門帰恋」「忘住居恋」「依恋祈身」「滿遠路恋」「惜人名恋」「題不知恋」「互恨絶恋」

雑は「曉更寢覚」「薄暮松風」「雨中緑竹」「波洗石苔」「高山待月」「河水流清」「春秋野遊」「関路行客」「山家夕嵐」「山家人稀」「海路眺望」「月羈中友」「旅枕夜雨」「海辺暁雲」「寄夢無常」「寄草述懐」「寄木述懐」「逐日懐旧」「社願祝言」

本資料は、他の資料に比べて一回りほど小さい（二三・二糎×一五・八糎）が、第一丁目だけ、前の資料の最終丁に貼り合わせてあるため、大きさが異なる。料紙は斐楮混漉の薄様で、他の本に書写されていたものを切り取って、『視聴草』に合綴したものである。

朱書で誤字などに校正が入れている。

【書誌】

内題・「商山和歌集」（一ウ）

墨付丁数・三八丁

料紙・斐楮混漉紙（半葉二三・二糎×一五・八糎）

行数・一二行

字高・一七・〇糎

印記・なし

【刊年・刊行者】

奥書は以下の通り。

「天和二壬戌年於以安適本／写之九月二十六日」

書写者は不明だが、奥書に拠れば天和二年九月二十六日に、「安適本」を底本として本書を書写したことがわかる。「安適本」の詳細は不明だが、元禄頃に活動した歌人原安適の手による写本を指すか。

【七一】新院女歌仙 後西天皇撰 写年不明

続五集之七 「請求番号二一七・〇〇三四（一四六）」

本資料は後西天皇が編んだ女性歌人の歌集。一般的な書名は『新女歌仙』。当館には『賜蘆拾葉』所収の写本（請求番号二一七・〇〇一一）も所蔵されている。また、元禄一一年には版本として刊行されている。本資料は和歌懐紙を意識した正方形に近い料紙（半葉一三・〇糎×一四・〇糎）に、半葉に一首ずつ、散らし書きなどの様々な書写がされている。

後西天皇は、文芸を能くしたことで知られ、和歌・連歌・書道・茶道・

華道・香道などの様々な道に通じ、御集は『水日集』または『緑洞集』と称される。御撰にも『集外歌仙』などを挙げることで、本書もそのうちの一つである。

後西天皇は後水尾天皇の第八皇子に生まれ、正保四年には高松宮家を継承して桃園宮・花町宮と称したが、後光明天皇の崩御の際に、その養子となって皇位を継承することになっていた識仁親王（靈元天皇）がまだ生後間もなかったため、その成長までの中継ぎとして、明暦二年に急遽践祚した。在位は十年で、寛文三年に識仁親王に譲位し、貞享四年に四九歳で崩御。

様々な文芸に秀でていた点は、父親である後水尾天皇の影響とされる。但し、後西天皇の事績として特に注目すべきは、御府の記録類を謄写させて多くの副本を作成し、現在の京都御所東山文庫の基礎を作った点である。寛文元年に皇居は火災に見舞われ、このとき多くの蔵書を失ったが、後西天皇による新写の副本は火を免れたため、多くの貴重な資料が後世に受け継がれることとなった。

本書に採られた歌人は、巻頭歌に新上東門院以下三十六人で、三十六歌仙になぞらえたもの。歌はおよそ春夏秋冬の順に並ぶ。

本資料の冒頭（一才）には「宮崎文庫」の印がある。

【書誌】

内題・「新院女歌仙」（一才）

墨付丁数・一八丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇糎×一四・〇糎）

行数・不定

字高・不定

印記・「宮崎文庫」（一才）

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【七二】春の山踏 間宮永好 嘉永二年写

続五集之八 「請求番号二一七・〇〇三四（一四七）」

本資料は内題が「春の山踏」（一才）となっているが、一般的な書名は「春の山路」。水戸藩士で国学者でもあった間宮永好が、広尾にあった堀田備中守正睦の下屋敷を訪れた際の、庭園の春の景色と和歌を記したもの。

間宮永好は、水戸藩士で国学者。妻の八十子と共に歌人としても知られている。国学を小山田与清に師事し、天保年間には水戸藩倭書局に勤めた。明治維新を経てからは、新政府に出仕し、神祇権大史を務めた。明治五年に六八歳で死去。著作は歌集をはじめとして、注釈書・随筆など多数に及ぶ。

現在、盛岡中央公民館に複数の写本の所蔵がある。これらは南部家の旧蔵書で、徳川斉昭の娘で、慶喜の姉に当たる明子が、南部藩に嫁いだことがその理由と思われる。明子もまた歌人として知られていたが、その師が間宮永好であり、盛岡に残る間宮永好の関係資料は多くが明子の旧蔵書だと考えられている。（山田洋嗣「間宮永好、八十子と南部利剛、明子と——挿話として」『福岡大学人文論叢』四一・二号、二〇〇九年）

本資料は、他の資料に比べて料紙が一回り小さい（半葉二三・〇糎×一六・五糎）が、字高は一九・〇糎と高め。

【書誌】

内題・「春の山踏」（一才）

墨付丁数・一〇丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇糶×一六・五糶）

行数・一〇行

字高・一九・〇糶

印記・なし

【写年・書写者】

本文末尾（一〇ウ）に元奥書が見られる。

「嘉永二年三月十九日の夜松屋主人／間宮永好誌」

「松屋主人」は間宮永好の号である。これによれば嘉永二年三月の成立であることがわかる。また本書には、左下に小字で次のような書き込みがある。

「己酉八月十九日写竟一校」

嘉永二年は己酉の年に当たり、この奥書によれば、本書成立の同年八月に本資料を書写したと考えられる。

【七三】住吉奉納詠三十二首和歌 石野広道・宮部義正 写年不明

続五集之八 「請求番号二二七・〇〇三四（一四七）」

江戸中期に活動した、歌人の石野広道・宮部義正による三十二首の和歌で、住吉大社に奉納されたもの。題詠三十二首を二人で交互に詠む。本文によれば冷泉為村によって合点が入れられたらしい。石野広道・宮部義正は共に和歌を冷泉為村に師事した。本書の一才の余白には、この二人の名前を取って、「広義住吉奉納詠」と題が付けられている。

石野広道は佐渡奉行・御普請奉行などを務めた旗本で、歌は初め、武者

小路公野・高松重季に学び、そののち冷泉為村の門に入った。有職故実は伊勢貞丈に学び、江戸堂上派の武家歌人として知られた。著作は歌集をはじめ、日記・故実など、多くが残る。寛政一二年に八三歳で没した。

宮部義正もまた、「関東の公家」とまで称された堂上派の歌人である。上野高崎藩士。年寄役まで上るが、致仕して幕府の和学所に仕え、やがて將軍の歌道師範となった。和歌は冷泉為村に師事したのち、烏丸光胤・日野資枝に学んだ。妻の万、子の義直も歌人として知られる。寛政四年に六四歳で没した。

本資料は他の資料に比べて一回り小さく（半葉二三・〇糶×一六・五糶）、藍で匡郭（四周单边・有界、半葉一八・〇糶×一三・〇糶）が印刷されている。

【書誌】

内題・「住吉奉納詠三十二首和歌」（一才・一行目）「広義住吉奉納詠」（一才・右余白）

墨付丁数・四丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇糶×一六・五糶）

匡郭・四周单边、有界（半葉一八・〇糶×一三・〇糶）、藍色

行数・一一行

字高・一八・〇糶

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【七四】義烈百人一首 川柳五世撰 写年不明

続五集之八 「請求番号二二七・〇〇三四（二四七）」

本資料は川柳緑亭（川柳五世）の撰による異種百人一首で、院政期から近世初期までの武将やその夫人の和歌を採録したもの。巻頭は源実朝で、巻軸は加藤清正。本来は序文があり、それによつて嘉永二年の成立と知られているが、本資料は序文・口絵などを欠く。嘉永三年に絵入り版本として出版され、その際の挿絵は、葛飾北斎や歌川国芳ら人気絵師が分担して描いた。本資料はこの嘉永三年版からの書写と思われる。

川柳五世は、本名を水谷雅好、通称を金蔵といい、本資料の末尾には「水谷川柳緑亭」とある。日本橋茅場町に生まれるが両親を早くに亡くしたため、代々幕府御用を務めた佃島の漁師水谷太平次に養育された。家業の傍ら川柳二世に弟子入り。当初の号「腥齋佃」（なまぐさいたづくり）は、この出生に由来する。のち四世に学び、天保八年に川柳五世を襲名した。安政五年に七二歳で没。著作は雑俳書のほか、本資料を含め、『烈女百人一首』『秀雅百人一首』『新人百人一首』『贈答百人一首』『英雄百人一首』『続英雄百人一首』など、異種百人一首も多く編んでいる。

本資料は他の資料に比べて、大きさはやや小さいが（半葉二三・四×一六・五糎）、その他、四周双边・無界の匡郭（半葉一八・〇糎×一二・四糎）が印刷されている。匡郭内には、和歌と歌人の名前が記されており、匡郭の外、上部の余白部分には、版本の頭書の抜粋が写されている。版本の頭書には、歌人の来歴や他の代表的な歌などが記されているが、本資料の場合は余白部分が狭いため、その抜粋になっている。

本文末尾は一〇才で、「水谷川柳緑亭撰」とある。一〇ウには、次に綴じられた資料の一丁目貼り付けてある。

【書誌】

内題・「義烈百人一首」（一才）

墨付丁数・一〇丁

料紙・楮紙（半葉二三・四糎×一六・五糎）

匡郭・四周双边、無界（半葉一八・〇糎×一二・四糎）

行数・一〇行

字高・一八・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【七五】やけ野の日記 町尻量原 写年不明

続五集之八 「請求番号二二七・〇〇三四（二四七）」

本資料は、公家の町尻量原が記した、京都に甚大な被害を及ぼした天明の大火に関する記録。特に宮中の混乱や、避難の様子などを和歌と共に記している。一般的な書名は『天明炎上記』、または『樵夫東林記』等。本資料には、内題の下（一才）に作者名として「野尻三位」とあるが、正しくは「町尻三位」。松浦静山の『甲子夜話』には「野尻三位」と引用されている点から見て、本資料は『甲子夜話』からの転載と想像される。

著者の町尻量原は京の公家で、安永八年に従三位に上り、寛政九年には参議、同十年に従二位。町尻家の養子に入ったが、実家は吉田神社祠官の吉田（卜部）家であったため、神道に通じ、著作も神道関係のものが多し。妻は冷泉為村女。寛政十一年に五九歳で没。天明の大火の時点では三位の

座にあったため「町尻三位」とされる。

天明の大火は、正月晦日の未明に、鴨川東側の宮川町団栗辻子から出火したとされ、このことから「団栗焼け」とも呼ばれた大火である。強風のために広く延焼し、夕方には二条城本丸に燃え移り、洛中北部の御所も炎上した。本資料はこの内裏への類焼を中心に描かれているが、最終的には内裏のみならず、仙洞御所・京都所司代屋敷・東西両奉行所・撰閲家の邸宅など、民家以外にも、都の要となる主要な施設・邸宅も焼け落ちた。鎮火には二日間を要したとされる。

本資料は、料紙が特徴的で、他の資料に比べて幅が広い（半葉二四・〇糎×二〇・五糎）。表紙よりも五糎ほど横幅が大きいため、小口側の五糎ほどが内側に折り返されている。本文は一部、朱書で校正が入れられている。

【書誌】

内題・「やげ野日記」（一才）

墨付丁数・八丁

料紙・楮紙（半葉二四・〇糎×二〇・五糎）

行数・一〇行

字高・一九・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者は不明。

【七六】二十題扇合 写年不明

続六集之二 「請求番号二一七・〇〇三四（二五一）」

本資料は、嘉永七年に上野不忍池で催された左右二十題の扇合わせの記録。和歌や判詞のみならず、扇合わせの式次第や、左右講師の心得など、扇合わせの作法や進行方法についても別添で記載がある。

扇合わせは主に宮中で催されていた遊びで、扇に書かれた詩歌などを左右に分かれて優劣を競ったもの。本資料における左右の題は、歌枕になっている。

左は「大井川」「伊香保沼」「逢坂関」「難波江」「信田社」「佐野船橋」「小夜中山」「松嶋」「伏見里」「桂里」。

右は「初瀬山」「三豆御牧」「布引滝」「猪名野」「明石浦」「天橋立」「吉野川」「浮嶋原」「三津浜」「武蔵野」。

本資料の料紙は、切り取られて欠けている個所が多くあり、また、別の資料が貼付されたり綴じ込まれたりするなど、多く手が増えられている。

料紙は一般的な楮紙で、大きさも表紙とほぼ同じ（半葉二四・二糎×一六・五糎）だが、袋綴になっている第一丁目の一ウに相当する半葉が切り取られて欠けている。

また第一丁目と第二丁目のあいだに「扇合次第」の内題を持つ料紙が綴じ込まれている。大きさは一六・〇糎×五三・〇糎で、内側に畳むようにして折りこんである。またこの料紙の地側に左右講師の心得について書いた付箋（一六・〇糎×七・五糎）が貼付されていて、こちらは天側に向かって折りこんである。

また第二丁目の二才に相当する半葉のノド側九・〇糎ほどが欠けている。これは一六ウに相当する半葉も同様で、共に本文部分の前後に当たる。別の写本から本文のみが切り取られて綴じられていると思われる。

さらに一七才に当たる部分も欠けている。一八才の小口側も八・〇糎ほど欠けているが、そこに別の料紙が継がれており、奥書はその料紙に書か

れている。筆跡も本文と別筆に見えることから、奥書ごと後補であると思われる。

【書誌】

内題・「二十題扇合」（一才）

墨付丁数・一八丁

料紙・楮紙（半葉二四・二糶×一六・五糶）

行数・一二行

字高・一七・五糶

印記・なし

【写年・書写者】

奥書は先に述べた通り、本文とは別筆に見える。

「右嘉永七甲寅水無月拾七日於／不忍池神官之家執行之畢」

【七七】 見るめのさち 成島司直 写年不明

続六集之六 「請求番号二二七・〇〇三四（二五五）」

本資料は成島司直の手による紀行文で、江戸から川崎大師までの景物を和歌・漢詩と共に描いたもの。大東急記念文庫に自筆稿本が所蔵されている。三月末に江戸を発ち、暮春の風景を描いていると同時に、途上の名所・旧跡などを基に故事を引くなどしている。

成島司直は、近世後期の奥儒者で、天保一四年に御役御免隠居慎を命じられるまで、將軍侍講を務めた人物である。号は東岳、翠麓、潤園。江戸に成島衡山の子として生まれ、奥儒者見習、大番格などを経て奥儒者となり、文化八年からは『徳川実紀』編纂に関わって正本を完成させた。天保

一四年に侍講を辞してからは役職に就かず、早逝した養子の筑山の代わりに孫の柳北の後見となった。和漢の学問に通じており、残した著作は多数にのぼる。また和歌を能くし、『司直詠草』等の歌集を残していると同時、また本資料のような紀行文も数多く記した。

本資料の料紙は、横幅が他の資料に比べて大きいため（半葉二四・五糶×一八・五糶）、小口側の四糶程が内側に折りこまれている。一才の小口にはヤケが見られる点から、元は表紙からはみ出したままの状態で綴じられていたらしい。

一才には「図書局文庫」「日本政府図書」「内一二七一八号」の印記がある。これは、本資料が『視聽草』続六集之六の冒頭の資料に当たるため。本文には朱書で校正が入られている。

【書誌】

内題・「見るめのさち」（一才）

墨付丁数・一三丁

料紙・楮紙（半葉二四・五糶×一八・五糶）

行数・九行

字高・二〇・五糶

印記・「図書局文庫」「日本政府図書」「内一二七一八号」（一才）

【写年・書写者】

元奥書は以下の通りで、天保四年の成立であることがわかる。

「天保四とせの卯月 成嶋司直謹上」

但し、写年・書写者については不明。

【七八】正敦朝臣吹上苑記 堀田正敦 写年不明

続六集之八 「請求番号二二七・〇〇三四（二五七）」

本資料は文化三年に成立した堀田正敦による吹上御苑の風物を記録したものである。他の幕臣たちと共に初夏の吹上に出掛け、その様子を和歌と共に残した。一般的な書名は『吹上苑記』（あるいは『吹上記』）で、早稲田大学などが写本を所蔵している。

文化三年当時、吹上は人工的に整備された広大な庭園で、中央には「広芝」と呼ばれる広庭や、大池、滝、築山などが造成されていた。大小様々な茶屋、梅林、花壇などの鑑賞施設もあれば、馬場や鉄砲打場の武練場、さらに田畑もあり、上納された野菜の苗が栽培されていたという。面積は十三万坪あまり。江戸城の築城当初は、吹上は甲州街道からの攻撃に備えて造営された防衛上の一郭だった。半蔵門から順に尾張・水戸・紀伊と御三家の屋敷が並び、濠に添って多くの武家屋敷が設けられていたという。しかし、明暦の大火の際、市街で燃え広がった火がこの武家屋敷に移り、天守閣・本丸殿舎などが類焼の被害に遭ったため、以降、武家屋敷は郭外へと移されて、空き地となった吹上は次第に庭園として整備されていった。現代ではさらに庭園設備も失われ、吹上御所などを存する他は巨大な森林となっている。

堀田正敦は、仙台藩主伊達宗村の八男に生まれ、堅田藩主堀田正富の養子として入り、天明七年に家督を継いで堅田藩主となった大名である。寛政の改革の折には若年寄として財政事務を担当し、政務においても有能であったのみならず、和漢の学問に通じており、『寛政重修諸家系譜』編纂事業の総裁を勤めた。天保三年に致仕。多くの詠草が著作として残るが、正敦は博物学者としても知られ、鳥類分類図鑑の『観文禽譜』なども編んで

いる。松平定信は勿論、屋代弘賢や林述斎ら学者・文人たちと広く交流し、古書の蒐集・書写も行い、旧蔵書には「堀田文庫」の印が押されている。天保三年に七八歳で没。（異説あり。）

本資料の成立した文化三年頃には、三〇〇〇石の加増があり、翌年にはロシア船接近の視察のために松前藩へ経つなど、政務に励んでいた頃である。

本資料は、他の資料に比べて料紙の幅が大きく（半葉二四・〇糎×二〇・〇糎）、小口側の三・五糎ほどが内側に折りこんである。

また、内題「正敦朝臣吹上苑記」（一才）は、元は「雑事記十二」とあったものを、上から貼紙をした上で修正したもの。

【書誌】

内題・「正敦朝臣吹上苑記」（一才）

墨付丁数・三丁

料紙・楮紙（半葉二四・〇糎×二〇・〇糎）

行数・一〇行

字高・二〇・五糎

印記・なし

【写年・書写者】

元奥書は以下の通りで、文化三年の成立であること、また、同道した人物についての記載がある。

「文化三つのとし卯月よりこの御園に遊ひし人々／長岡侍従古河侍従さゝ山侍従岩城侍従能登／守乗やす駿河守家長兵部少輔なを朗備中／守高久大膳亮幸完あふみの守貞温等なり」

ここに名を連ねている人物は、それぞれ、「長岡侍従」は越後長岡藩主牧野忠精、「古河侍従」は古河藩主土井利厚、「さゝ山侍従」は篠山藩主青山

忠裕、「岩城侍従」は磐城平藩主安藤信成、「能登守乗やす」は美濃岩村藩主松平乗保、「駿河守家長」は大和高取藩主植村家長、「兵部少輔なを朗」は越後与坂藩主井伊直朗、「備中守高久」は丹後峰山藩主京極高久、「大膳亮幸完」は美濃八幡藩主青山幸完、「あふみの守貞温」は、豊前小倉新田(千束)藩主、小笠原貞温のこと。

ただし、写年・書写者については不明。

【七九】定敬大小朔支詠 写年不明 菅沼定敬

続六集之十 「請求番号二一七・〇〇三四(一五九)」

本資料は、幕臣で歌人の菅沼定敬による月次和歌。一月から二月まで一首ずつ、朔日(一日)を題として詠んだもの。

菅沼定敬は、書院番・小姓組番頭・書院番頭・給仕肝煎・留守居などを歴任した幕臣で、歌人としての詠草を多く残している。天保九年の『七夕百首』は、七夕の日の一晚に百首を詠んだという。和歌の師ははっきりしないが、海野遊翁らと推定されることが多い。(川島園子「菅沼定敬」『東海学園国語国文』三〇号、一九八六年)従五位下、伊賀守、信濃守。本資料では「菅沼伊賀守定敬」(一才)とある。嘉永四年没。現在も浅草寺に歌碑が残る。

月次和歌の題はそれぞれ以下の通り。

正月は「春従東来」、二月は「梅花薰衣」、三月は「花影写水」、四月は「首夏軒樹」、閏五月は「山中郭公」、五月は「杜五月雨」、六月は「名所鶉川」、七月は「秋花隆興」、八月は「月前遠情」、九月は「行路紅葉」、十月は「屋上時雨」、十一月は「雪中眺望」、十二月は「年已為暮」。

閏月を含めるため、全部で十三首。その月ごとに、大の月は「大」の字で始まり、小の月は「小」の字で始まるよう工夫されている。

本資料の料紙は、他の資料に比べて一回り小さい。

【書誌】

内題・「定敬大小朔支詠」(一才)

墨付丁数・三丁

料紙・楮紙(半葉二四・二糎×一七・〇糎)

行数・一一行

字高・一九・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【八〇】文雄雀宿戯歌 写年不明

続七集之三 「請求番号二一七・〇〇三四(一六二)」

本資料は絵巻に仕立てられていることで知られる御伽草子『雀の発心』の写本。他に『鳥歌合絵巻』『ことりものがたり』『小藤太物語』などの書名があるが、本資料の題目は内題を元に採っている。「文雄」の名前は奥書にも見え、おそらく無相文雄を指すと思われるが、詳細は不明。手彩色の挿絵入り。

『雀の発心』は、雀の小藤太を主人公とする異類物。蛇に我が子を食われてしまった小藤太のもとに、様々な鳥たちが弔問して歌を寄せる。やがて小藤太は妻と共に出家することを決意し、鼻のもとで剃髪する。その後、

諸国を回った小藤太は、ある森にすみついて踊念仏をなし、百歳で往生を遂げる。

作者については二楽軒娘新典侍、勾当内侍らが擬せられることが多いが、後世の仮託の可能性が高い。曲亭馬琴は名古屋を訪れた際、山崎良民所蔵の絵巻物『すゝめ松はら』を見たとき記しており、そこには、「勾当の内侍の作といふ、雀の死したるを諸鳥のとむらふなり、いにしへの戯作なるべし、いづれの時の内侍にや詳ならず。」として、勾当内侍作者説を書き留めている。(頭注ではこの勾当内侍を四辻季春妹としている。)

伝本には日本民芸館所蔵本、岩瀬文庫所蔵本、慶應義塾図書館所蔵本などに代表される三系統が知られるが、いづれも異同が多いことで知られる。本資料の挿絵の系統は比較的岩瀬文庫所蔵本に近いが、省略されている箇所が多い。

本資料は元の絵巻物を意識したのか、横長の料紙(一六・三糎×二二・〇糎)に記されているが、これは元々は三二・六糎×二二・〇糎の縦長の判の紙を、中央から二つ折りにして横長に直したものである。そのため、袋綴じにはなっておらず、天と小口側が開いている状態。また、綴じ方にも特徴があり、一丁目から五丁目までは地側に寄せて綴じられているもの、六丁目から一四丁目までが天側に寄せて綴じられている。一五丁目から一九丁目まではまた地側に寄せて綴じられていて、互い違いになっている。また、いづれの丁も横幅が表紙より大きいため、小口側五糎程が内側に折りこまれている。

【書誌】

内題・「文雄雀宿戯歌」(一才)

墨付丁数・一九丁

料紙・楮紙(半葉一六・三糎×二二・〇糎)

行数・不定
字高・不定

印記・なし

【写年・書写者】

一九ウには以下の通りの和歌がある。

「子を思ふ／心つくしの／はてはた／にしへすゝめの／ほかなりけり
／文雄／之御書」

【八一】新百人一首 足利義尚撰 写年不明

続七集之四 「請求番号二七・〇〇三四(一六三)」

本資料は文明一五年に室町幕府第九代將軍の足利義尚が選定した私撰和歌集『新百人一首』の写本。別名『常德院撰和歌集』等。藤原定家による小倉百人一首から漏れた歌人の歌を、勅撰和歌集から選定したもの。巻頭歌は文武天皇(『古今和歌集』)、巻軸歌は花園院(『風雅和歌集』)。但し、「従二位成忠女」として入集している歌人は、小倉百人一首における「儀同三司母」と同一人物(高階貴子)で、これに関しては意図的にそうしたというよりも誤りであると考えられている。写本は多く伝来しており、当館所蔵の『墨海山筆』(請求番号二七・〇〇三〇(二二))のうちにも所収されている。版本も多く、長いあいだ版を重ねている。主なもので、明暦三年版、元禄九年版、享和二年版、文化一一年版等である。本資料の場合、序文や奥書を欠いているため、元となった写本・版本については不明である。

撰者となった足利義尚は、八代將軍足利義政と日野富子のあいだに生ま

れた長子で、その誕生時にはすでに義政の弟である義規が將軍継嗣と定まっていたため、義尚を推す日野富子と山名持豊、義規を推す細川勝元とのあいだに対立を生み、応仁の乱のきっかけを作ったとされる。文明五年に將軍職に就いてからは積極的な幕政改革に臨み、六角氏征伐のために自ら出陣する程だった。このとき、政道について指南したのは一条兼良で、『樵談治要』『文明一統記』などは義尚に献上するために書かれたものである。また義尚は、幼少時から和歌を能くし、頻繁に歌会を催している。このとき師事したのも一条兼良で、『常徳院集』等の歌集を多く残すことになった。延徳元年に二十五歳で陣中に没。

本資料の料紙は、他の資料に比べて一回り小さい（半葉二三・〇糶×一六・五糶）。

【書誌】

内題・「新百人一首」（一才）

墨付丁数・一一丁

料紙・楮紙（半葉二三・〇糶×一六・五糶）

行数・一〇行

字高・一七・五糶

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は、奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【八二】花月候の百首 松平定信 写年不明

続七集之四 「請求番号二二七・〇〇三四（一六三）」

本資料は松平定信の百首和歌。定信は楽翁のほか花月主人とも号し、花月候とも称されたため、この題が付せられたと思われる。部立は、春夏秋冬恋雑を立て、さらに細かい歌題が立てられている（組題百首）。一題につき二首。

松平定信は、天明の飢饉の折に白河藩政を立て直し、三〇歳で老中首座となり、寛政の改革を断行したことで知られているが、それと同時に、文雅の道を能くし、優れた歌人で国学者でもあった。まず実父である田安宗武が歌人・国学者として名高く、その影響もあって、田安家近習頭の大塚孝綽に師事して幼時から学問に励んでいたという。一二歳の頃に道德を説いた『自教鑑』を著して以来、生涯で数百部に上る著作・編纂物を残すことになる。幕府の中枢にあった寛政年間までは政治経済に関する著作が中心のだったが、その後には文芸・考証を主とし、有職故実や古書画・古器物の研究、国学など、多岐に渡って学問の成果をその著述に残した。和歌に関しても深い造詣があり、最も著名な歌集は『三草集』だが、本資料のような百首和歌も多く残している。文政一二年に七二歳で没。

本資料は内題「花月候の百首」（一才）とあるその下に「白川候也」とあったものを、墨書で上から消している。「白川候」も白河藩主であった松平定信のことと見られる。

本資料の料紙は横長で（半葉一二・五糶×三四・五糶）、大判の紙を二つ折りにして両面に書写したものの。そのため袋綴じにはなっておらず、天と小口側が開いている状態。また、横幅が表紙よりも大きいため、三つ折りに畳んだ状態になっている。第一丁目から第四丁目までが地側に寄った位置に綴じられており、一方、第五丁目から第一一丁目までは天側に寄った位置で綴じられている。

【書誌】

内題・「花月候の百首」(一才)

墨付丁数・一一丁

料紙・楮紙(半葉一二・五糎×三四・五糎)

行数・二八行前後

字高・一一・五糎

印記・「図書局文庫」(一才)、同印(五才)

【写年・書写者】

本資料は、奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【八三】内院和歌御会始(享保十四年正月廿四日公宴和歌御会始・享保十四年正月十八日院和歌御会始) 写年不明

続八集之六 「請求番号二二七・〇〇三四(一七五)」

享保一四年に宮中で催された和歌御会始の際に詠進された和歌集。正月二四日に朝廷で催されたものと、それに先立つ一八日に院御所で催されたものの二つを併せて綴じている。

和歌御会始は鎌倉時代にその起源を見ることができ、当初は、一日のうちには作文始・管絃始と併せて催すもので、正月に限らず、帝や院の治世の始めに開催されることも多かった。しかし、これらの行事は室町時代に一度中絶したようである。

そこで、明応一〇年になって後柏原天皇が、後円融天皇の永和年間の和歌御会始を模範として、正月の月次歌会を独立した儀式として執り行い、これが以降続く和歌御会始の直接的な起源となった。(小川剛生「南北朝期の和歌御会始について」『和歌文学研究』七八号、一九九九年)

本資料は『享保十四年正月廿四日公宴和歌御会始』『享保十四年正月十八日院和歌御会始』として、それぞれ書陵部や陽明文庫などに写本が残る。江戸時代に入ってから御会始はほぼ連続して執り行われており、その都度の記録が残っている。

享保十四年当時は、中御門天皇の在位期間に当たり、時の院は靈元上皇である。歌人には当時の左大臣二条吉忠をはじめとした公卿たちが名を連ねている。

公宴和歌御会始の折の題は「花為佳会媒」、院和歌御会始の折の題は「仙家勝趣」である。列座している人々はほぼ同じ顔ぶれだが、読師・講師・発声・奉行などに入れ替わりがある。

本資料の料紙は横型(半葉一三・二糎×二〇・〇糎)で袋綴。横幅が表紙より大きいため、内側に五糎程折りこんである。また内題の書かれた扉(一才)にヤケが見られる。

第二丁目〜第一三丁目までが「享保十四年正月廿四日公宴和歌御会始」で、第一四丁目〜第二三丁目までが「享保十四年四月十八日院和歌御会始」となっている。

【書誌】

内題・「内院／和歌御会始／享保十四年／正月」(一才)

墨付丁数・二三丁

料紙・楮紙(半葉一三・二糎×二〇・〇糎)

行数・一二行

字高・一二・二糎

印記・「図書局文庫」(二才)

【写年・書写者】

本資料は、奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【八四】夜の梅 山本正重 写年不明

続八集之七 「請求番号二一七・〇〇三四（二七六）」

本資料の一般的な書名は『山本正重聞書』または『山本友心聞書』で、歌人である山本正重の談話を筆録して近世前期に成立した歌学書。内題は「和歌秘訣」（一才）と本文一行目にあるが、「夜の梅」（一才）という題が第一丁目の天側に書き加えられており、こちらが題目として採られている。

山本正重については近世前期に活動した歌人で、伊勢の人であるということの他はあまり詳らかではない。号は友心。本資料の跋文によれば、後陽成天皇の弟で歌人としても知られていた天台座主の良恕法親王（中院通勝の門）の門人であり、老境に差し掛かって、法親王から授かった和歌の教えを残すために本書を書き取らせたという。山本正重の言を筆録したのはその弟子の祐海法印。

祐海は伊勢尾上の常明寺の僧であり、山本正重に和歌伝授を受け、門弟の秦直栄に伝えたという。貞享頃に失明し、元禄二年に没したことがわかっている。『歌道秘伝書』や『百人一首師説抄』などの著作がある。

本書の伝本はあまり多くなく、国立国会図書館所蔵の『輪池叢書』、当館所蔵の『墨海山筆』（請求番号二一七・〇〇三一（五四））の中に収録されていることが知られている。なお、本資料の写年は不明だが、『墨海山筆』における写年は天保五年である。異同がいくらか見られ、本資料との前後関係ははっきりしない。

本資料の料紙は、他の資料に比べて一回り小さく（半葉一八・〇糎×一三・〇糎）、色もやや異なっていて多少のヤケが見られる。また朱で合点が

加えられている。

【書誌】

内題・「夜の梅」（一才）「和歌秘訣」（一才）

墨付丁数・二三丁

料紙・楮紙（半葉一八・〇糎×一三・〇糎）

行数・九行

字高・一四・〇糎

印記・なし

【写年・書写者】

本資料は、奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。